

与那国の染織レポート
—戦後の織物の状況について—

平 川 信 幸

The dyeing and weaving report of Yonagunijima Island
—About the situation of the textile after the Pacific War—

Nobuyuki HIRAKAWA

与那国島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2009年3月30日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Yonagunijima Island, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2009

与那国の染織レポート —戦後の織物の状況について—

平 川 信 幸*

The dyeing and weaving report of Yonagunijima Island
—About the situation of the textile after the Pacific War—

Nobuyuki HIRAKAWA*

はじめに

2005年1月26日(水)より28日(金)にかけて美術工芸分野の総合調査を行った。文献などの事前調査により与那国島では染織に関する調査を目的とした。また、1987・88年に沖縄県立博物館・美術館(旧沖縄県立博物館)で与那国島の織物の起源や技法、素材、模様、伝世資料などについて調査を行っている。そのため、今回の調査では前回の調査を踏まえて、戦中から戦後以降の織物を取りまく状況や道具、素材の変化などに焦点をあてて聞き取りを行った。

聞き取りの対象者は多い方が好ましいが、終戦直後から与那国町織物協同組合の結成までの状況を確認出来る人物に範囲を絞った結果、池間苗氏(大正8年生まれ)、崎原キヨ氏(大正14年生まれ)のお二人となった。聞き取りで不十分な点は文献等で確認・補足作業を行った。なお、文献等で確認・補足作業を行う際は出来るだけ聞き取り調査の結果を優先した。明らかに聞き取り内容に矛盾が生じた場合は文献等の内容に依った。

聞き取りの質問は①戦前から戦後、1960年代の社会状況、②糸・染料の原料、③染織・機織りの道具について行った。また、聞き取り調査で質問事項以外に重要と思われる情報があった場合は本稿に反映した。

与那国島の戦後の社会状況

戦前、与那国島から沖縄本島まで船で、待ち時間もいれて2週間を要した。一方、台湾までは13時間しかかからなかった。与那国島の住民にとって、台湾は身近な島であった。当時、台湾は日本領となっており、日本政府によって近代化が進められていた。台湾の中心地、台北は東京や大阪などについだ都市であった。与那国には東洋最大の鯉節工場があり、経済的にも豊かで、裕福な家庭の子息は修学旅行で台湾へ行っている。また、出稼ぎや進学などで台湾との往来も頻繁だったようである。^{*1}

さらに、終戦直後は国境の島として、中国へ返還された台湾やアメリカ占領下の沖縄からの物資輸送の中継地点になり賑やかな時期もあった。しかし、こうした時代もすぐに終わりを迎える。^{*2}

与那国の織物は戦前から戦後の一時期まで染織は商業用というよりも自家用として織られ、織物が得意なものが知人に依頼されて贈答用に織るという程度であったようである。

終戦直後は織物をつくるための物資が不足し漁業用の網をほどいて代用していた。また、1965年ぐらいまでは台湾製の帯をほどいて花織の色系に使用しており、織物の伝統技術は衰退つつあった。^{*3}

今後、詳細な分析が必要になると思われるが、終戦直後の賑やかな経済状況の一方で、織り糸が不足し、代用していたということは、戦前から戦後にか

※ 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

けて、与那国の衣料の時代的な変遷があったと考えられる。

繊維の変化

現在、与那国で生産される反物のほとんどが絹で織られている。しかし、王国時代から戦前にかけて沖縄の島々では絹以外に苧麻や芭蕉など様々な材料で反物が生産されていた。^{*4}

終戦直後は与那国でも他の地域と同じように絹、苧麻、芭蕉糸で織物が織られていた。昭和20年代(1945～1954)に入ると、絹、苧麻、芭蕉糸が手に入らなくなったようで、漁業用の網をほどいて織っている。工業指導所の調査(表1)によるとこうした状況は昭和40年(1965)頃まで続き、この時期まで台湾製の帯をほどいて織っている。^{*5}

材料の繊維が不足している状況は恐らく、衣料供給の時代的な変遷があったと考えられる。つまり、戦後の与那国の「景気時代」^{*6}と呼ばれる時期に、台湾から豊富な物資とともに衣服などがもたらされ、各家庭で自給されていた衣料が作られなくなった結果、織物用の繊維が事欠くような状況になっていったのではないだろうか。

繊維を代用してた昭和40代初期から中期にかけて、苧麻や綿に繊維が変わっていき、昭和50代(1975)になると現在のように絹が使われるようになる。^{*7}こうした変化は昭和40年(1965年)、琉球政府の工業振興奨励補助事業の適用を受け、与那国島で織物技術養成事業が開始されるのと時期が重なっている^{*8}。

当時、綿や苧麻は家の裏の畑で栽培し、芭蕉は畦や山にあるものを採集して、糸績みは公民館など多くの人が集まる広場などで共同作業を行ったという。しかし、絹や綿、苧麻、芭蕉の糸績みには出来不出来があり、問屋への買い取りの値段に影響し、更に綿や苧麻の反物は絹に比べると安く取引されるたという。そのため、与那国島では業者から絹糸を購入して、自分で染めて、織物を織るようになった。^{*9}

与那国島での糸の素材の変化は昭和から与那国島で織物が産業化していく過程で、原料の確保と製品としての需要と対応していくものと考えられる。

染料について

久米島の紬の焦げ茶色、宮古上布の濃い紺色、八重山上布の白色など現在、現在の沖縄県下の各島で織られている織物は技法や柄とともに色彩が一つの特徴となっている。与那国島の染織として、紺を基調にアクセントとして赤い色が入っている労働着のドゥタテやお守りな意味を持つ手拭いのティサージなどが残されてる。こうした与那国の織物は淡い色調の青、緑、ピンクなどを巧みに組み合わせたものが制作されている。

聞き取り調査ではインドアイ、シャリンバイ、フクギ、ガジュマルなどの植物の名前が聞かれた。これらの植物は近くの山に入って採集して来るという。また最近シャリンバイなどのよく使う植物は屋敷の回りに植えるようになっている。^{*10}一時、綿を織っている時期は化学染料を使うこともあったが、今では品質を守るために地域の染料植物で染めている。また、発色をよくし、色を定着させるための媒染剤は銅、鉄、石灰などがあり、媒染剤によって化学染料を使わずに豊かな色彩表現が出来るようである^{*11}。媒染剤は与那国町伝統織物協同組合より各織手に提供されるようで、2005年の調査時も組合事務所で糸を染める作業が行われていた。また、染料植物は上記のもの以外に(表2)のとおりヤマモモ、ソウシジュ、ギンネム、アカギ、ゲットウ、ブッソウゲなどが報告されている。^{*12}

機

機は大正8年(1919)生まれの池間苗氏の母親や大正14年(1925)生まれの崎原氏の母親ころまでは地機を使っていたが、両氏が機織りを始めた昭和の早い時期には高機が導入されていたようである。現在、与那国島では県工芸指導所が推薦する南風原式の高機を使用している。^{*13}昭和40年(1965)に琉球政府の工業振興補助事業の適用をうけて織物技術の養成事業が開始された。その時に工芸指導所によって南風原式の高機が導入されたと考えられる。そのため、近隣の石垣島で使われている八重山式の高機は構造が違っている。^{*14}

与那国町伝統織物協同組合

昭和28年（1953）、与那国島で主に緋の技術指導を目的とした八重山上布講習会が約2カ月間開かれ、それまで嫁入り前のたしなみ程度だった織物への考え方が変わり、関心が高まってくる。しかし、講習会の技術はあくまでも自家製のものとして、広くは定着しなかった。^{*15}

昭和40年（1965）、琉球政府の工業振興奨励補助事業の適用を受け、織物技術養成事業が開始され、与那国の織物が主婦の副業から地域の産業として位置づけられる。

昭和45年（1970）ころには、与那国の伝統工芸品の保存継承と販売を目的に与那国織物組合と与那国民芸品組合が発足する。^{*16}

日本復帰の2年後、昭和49年（1974年）に名称を与那国町織物協同組合と改め、さらに昭和53年（1978）には、与那国町伝統工芸館が完成し織子養成事業に基づく技術者の本格的な養成が始まる。また、与那国の織物が広く県外に紹介される。

昭和58年（1983）2月、与那国町伝統織物協同組合とさらに名称を変更して法人組合として再スタートし、昭和62年（1987）国指定伝統的工芸品として名を連ねることになる。^{*17}

おわりに

今回の調査は平成17年の与那国での聞き取り調査をまとめたものである。調査にあたり池間苗氏、崎原キヨ氏、与那国町伝統織物協同組合、与那国町役場の方々から多くのご教示とご協力をいただき、ここに感謝の意を表すものである。

沖縄県は各島々に、特徴のある多様な織物の技術が残されており、美術工芸の調査でも与那国島の染織に関する取りを行った。昭和62年から63年にも与那国島において織物の起源や技法、素材、模様、伝世資料などについての調査が行われていたので、今回は昭和の初めから現在までの状況の記録を行った。

与那国島の織物の道具は昭和の初めから昭和40年にかけて大きな変動の時期があり、現在の状況に落ち着いている。特に大きな動きがあったのは昭和40年（1965）、琉球政府の織物技術養成事業が開始さ

れ、与那国の織物が地域の産業として位置づけられた時期である。このことによって与那国島の織物の技術は工程の合理化、他地域との明確な差別化が計られた。差別化によって人気生まれ、ブランド化される。ブランド化によって自然に織り手の意識も与那国の伝統を守っているという意識生まれ、繊維は絹を使い、染料も島に自生する植物を使うなど、高い品質の保持が計られている。また、単純に伝統を順守するだけでなく業者が伝える客のニーズに、模様や色なども柔軟に対応しているようである。

しかし、与那国島も他の島々と同じく後継者不足が課題になっている。こうした背景には若者流出や経済的な理由が挙げられる。前回の調査報告書にも伝承者の定着が課題として揚げられ、社会的なバックアップシステムの構築が一つの解決策として提案されていた。現在、与那国町伝統織物協同組合では技術の伝承者の募集を県外まで広げ、技術の習得に対しては一定の経済的な特典を与えているようであるが、まだまだ、課題は多いようである。

註

- *1 池間苗氏からの聞き取り 2005年
- *2 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 1986年 1044頁
- *3 崎原キヨ氏からの聞き取り 2005年
- *4 「織りの海道」実行委員会 2002年
- *5 崎原キヨ氏からの聞き取り 2005年
- *6 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三 1986年
- *7 沖縄県工芸指導所 1996年
- *8 沖縄県工芸指導所 1996年
「織りの海道」実行委員会 2002年
- *9 崎原キヨ氏からの聞き取り 2005年
- *10 崎原キヨ氏からの聞き取り 2005年
- *11 崎原キヨ氏からの聞き取り 2005年
- *12 「織りの海道」実行委員会 2002年 68-71頁
- *13 池間苗氏、崎原キヨ氏からの聞き取り 2005年
- *14 沖縄県工芸指導所 1996年 23頁
- *15 沖縄県工芸指導所 1996年 107-109頁
- *16 「織りの海道」実行委員会 2002年 77頁
- *17 沖縄県工芸指導所 1996年

「織りの海道」実行委員会 2002年

沖縄県立博物館. 1989. 『県立博物館総合調査報告書VI与那国島』 沖縄県立博物館.

参考文献

「角川日本地名大辞典」編纂委員会. 1986.

『角川日本地名大辞典』 角川書店.

平凡社地方資料センター. 2002. 『日本歴史地名体系第48巻 沖縄の地名』 平凡社.

「織りの海道」実行委員会. 2002. 『「織りの海道 八重山・宮古編」記録集』 「織りの海道」実行委員会.

沖縄県工芸指導所. 1996. 『工芸指導所20年のあゆみ く染織技術編』 沖縄県工芸指導所.

田中俊雄・田中玲子. 1976. 『沖縄織物の研究』 紫紅社.

沖縄県教育庁文化課. 1997. 『沖縄の染織』 沖縄県教育委員会.

池間栄三. 1984. 『与那国の歴史』 池間苗子.

表2 竹富町の植物染料

名 称	名 称 () 内は方言名等の別名	科 名	使用部位、備考
藍・青色系	リュウキュウアイ (琉球藍)	キツネのマコ科	葉 沖縄本島の本部町伊豆味から購入
	インドアイ (キアイ)	マメ科	茎葉
	ゲッキツ (ギーゲツィ)	ミカン科	枝葉
茶色系	クール (紅露、ソメモノイモ)	ヤマノイモ科	根塊
	シャリンバイ (トッチ)	バラ科	樹皮、幹をチップにして使う
	ソウシジュ	マメ科	枝葉、幹をチップにして使う
	ヒルギ(ピンニキ) ・オヒルギ ・メヒルギ ・ヤエヤマヒルギ ・オオバヒルギ	ヒルギ科	樹皮
	ガジュマル	クワ科	樹皮
黄色系	フクギ (フンブトゥ)	オトギリソウ科	樹皮、根葉
	クチナシ	アカネ科	実
	ヤマモモ	ヤマモモ科	樹皮
	マエヤマアオキ (ブリッシ)	アカネ科	根皮
	ウコン (ウッキン、ウッチン)	ショウガ科	根
	ソウシジュ	マメ科	枝葉、幹をチップにして使う
灰色系	アカメガシワ	トウダイグサ科	枝葉、樹皮
	シイ	ブナ科	樹皮
赤色系	ベニバナ (タラババナ)	キク科	花
	ベニノキ (アンナットウ)	ベニノキ科	実
その他、ススキ、ヨモギ、センダン、アカリファ、センダングサ、サキシマスオウノキ、タブノキ、クロッグ (シーマニ)、ゲットウ等の身近な植物を使用			

『「織りの海道 八重山・宮古編」記録集より』



写真1 崎原キヨ氏宅裏の苧麻畑



写真4 与那国島で採取された植物で染められた糸



写真2 与那国町伝統織物協同組合にある染場



写真3 染め糸の発色をよくし定着させる媒染剤各種



写真5 現在、与那国で使われている高機